



モバン人の家で衣服や
日常用品を求め
(ペリーズのサン・アントニオ村)



お菓子やたばこが売られている
ガリフナ人の店
(ペリーズのホブキンス村)

ガリフナの資料を
探しているのを聞きつけて、
村人たちが物をもって
集まってきた
(ペリーズのホブキンス村)



一晩の豪雨のあと、冠水した道路
(ペリーズのプンタ・ゴルダ近郊)



物は町に、情報は村に —反比例の関係—

地球を 集める

八杉 佳穂
(やすぎ よしほ)

本館民族文化研究部



メキシコ大地震
(1985年)
写真提供: アフロ



メキシコ大地震に遭遇

たくさんのお金をもって、たくさんのお品物を買って、安全に日本まで輸送するという作業は、日々の研究生活とはおおよそかけ離れた行為である。だから問題なくことを運ぼうと思っただけで、たい無理な話である。それにもかかわらず、中米の民族資料の充実を図るために、わたしは収集を、それも懲りもせず、三回もおこなった。幸い現地での多くの人の協力のおかげで、無事に収集をおこなうことができたが、地震があったり、大雨にあつたり、車がエントラしたり、小さなトラブルは数え切れない。

地球が活発期に入ったのか、グアテマラやメキシコでも大きな地震が起きている。なかでも一九八五年九月一九日の朝に起こったメキシコ大地震は忘れがたい。ゆるやかな揺れがなかなか止まらない。地震には慣れっこになっているので、地震が起きたときにはベッドの下や机の下に隠れるとかいつていたなどのんきに構えているうちに、戸は開く、天井や壁がバラバラ落ちてくる。どうもふつうの地震とは違う。さすがにこれはやはりと思ひ、ホテルの六階から瓦礫だらけとなった階段をあわてて降りた。町に出てみると、ビルが至るところで崩壊している。二〇日近く収集した物を倉庫を借りて入れていたが、その一帯はひどい被害で、すぐさま立ち入り禁止になってしまい、近づけない。どうしようもないので、先にグアテマラの収集をおこなうべく、メキシコ

をあとにした。幸い倉庫も品物も無事であったが、倉庫が潰れていたら、違うホテルに泊まっていたら、と思うと、今さらながら運の良さを感じる。

ペリーズでは大雨に立ち往生

一九九三年に行つたペリーズでは、なぜかトラブル続きであった。南に住むモバン人の町サン・アントニオをたずねるために、ペリーズ市でジープを借りて出発したとたん、エンジンの調子が悪く、引き返さざるをえなくなった。時間をロスしないよう、車を換えてもらい、すぐ再出発した。ところが今度は途中でバンクである。これはよくあることで、レンチを出してタイヤを交換しようとしたところ、レンチが摩耗していて、困つたことにポルトがはずれない。ペリーズは近畿五府県を足したほどの面積に、たつた二〇万人ほどしか住人がいない。だからペリーズ市を出ると、ほとんど人に会うことがない。二時間経つても、三時間経つても、車は一台もとらぬ。どうしようもないので、覚悟を決めて野宿するしかないかと考え始めた矢先、幸運の女神が一台のジープをよこした。事情を話し、レンチを借りるとなんとびつたり合つてはいないか。次の町で、バンクを修理して、ガリフナ人の資料を集めた後、目的地のプンタ・ゴルダに着いたのは、夜中であつた。

次の日、サン・アントニオに行き、モバン人の家をたずね歩いたが、どこも留守。やつ

と出会った人の家で、お目当ての衣服のほか、椅子や道具など、目につくものいっさいがつかい求めようとしたが、わずかしが集まらなかった。その夜戻つたプンタ・ゴルダでは、激しい雨が降つた。次の日、帰ろうと思つて出発すると、道路が冠水して、どこにあるやらわからぬ状態である。すぐ水が引くであろうと思つて待つが、なかなか引かない。このままもう一晩泊まって、また夜に雨が降ると事態はさらに悪くなる。何しろ雨季の真っ最中である。幸い昼過ぎになつてやっと道路が見え出したので、そろそろと前の車の後について帰路に着く。ところが途中で、来るとき渡つたほんの数メートルの小川が、マヤ山地の水を集め濁流と化しているではないか。ずつと先に出発したバスが立ち往生して、長い列ができていく。無理して渡る車が少く流されるのだという。夕方になつて流れが少しは緩やかにになり、バスが出発する。しかし小さな車なので、なかなか踏み切りがつかず、さらに待つ。夕闇が迫るころ、意を決して渡ることにした。こわく窓の外を見ると座席上あたりまで浸水しているではないか。何とか渡り切つたものの、もうへとへとである。それからペリーズ市まではまだまだ距離があつたが、何とか深夜にたどり着いた。

データを集めながら収集

祭りや市が立つ日には、風呂敷に物を包んで背負い、片手にはラジオ、もう一方

には山刀姿の男たちをよく見かける。女たちはという、頭に風呂敷包みを寄せ、背に子どもを背負つた姿が一般的である。おそらくもち歩いている物は大切な家財道具一式である。だから村に収集に行くとき、使われている状況や物についての情報は確かに集まるが、苦勞して村に行つたわりには、物は少ししか集まらない。たくさん物を集めようと思うと、町にかざるが、物の情報はそれに反比例する。最近の博物館や美術館は、休憩スペースがふんだんにとつてあつて、ゆつたりしている。それに引き替え、民博の展示場では、物がところ狭しと並んでいる。日本が元気のいいときに展示されたため、休憩スペースなど考えもしなかつた。収集も、展示を充実させるために、まずは基本的な物をできるだけたくさん集めることが必要であつた。

外国のあるチームが一年かけて土器を丹念に収集したという本を手にし、羨望に駆られたことがある。わたしの収集はそれとは対極的な収集であつた。基本的な資料が集まつた現在、半年とか一年をかけて、じっくりとデータを集めながら収集をすることが望ましい。そんな提案を何年も前にしたのであるが、実現していない。効率とか成果とかが優先され、まだまだゆつたりした考えが浸透してない。それはまた日本が元気のいい証拠なのであろうか。